

【2023年日本ブドウ・ワイン学会 功労賞】

**日本ブドウ・ワイン学会誌の編集，刊行および
社会科学分野の論文掲載への多大な尽力**

小田 滋晃

公益財団法人ルイ・パストゥール医学研究センター
京都市左京区田中門前町 103-5

**Significant contributions to editing, publication, and featured articles in
the field of social sciences in the Journal of ASEV Japan**

Shigeaki ODA

Louis Pasteur Center for Medical Research
103-5 Tanaka Monzen-cho, Sakyo-ku, Kyoto 606-8225, Japan

この度，日本ブドウ・ワイン学会名古屋大会において功労賞を頂戴しましたこと，本当に栄誉なことで深く感謝申し上げます。今回の功労賞は，タイトルにありますように「当学会誌の編集，刊行」にかかる部分と，「当学会誌への社会科学分野の論文掲載」にかかる部分の2つに大きく分かれますので，それぞれについてご報告させていただきます。

私が，日本ブドウ・ワイン学会の編集委員長を，千葉大学大学院園芸学研究科の小原均教授から引き継いだのが2012年で，今年で12年目となります。当時，当学会を事実上創設された山梨大学ワイン科学研究センターの横塚弘毅教授が当学会の運営をエグゼクティブディレクターとして一手に担われており，当学会の編集委員会は基本，当学会本部事務局が置かれている山梨大学とは別の大学か研究機関に置くことが必須だということで，学会のガバナンスを有効に機能させることを狙っておられました。千葉大学の前は，近畿大学農学部のみ虫節夫教授（大阪府立北野高等学校の先輩）が初代編集委員長として当学会の編集を担われていました。私が編集委員長を引き継いだ時，編集委員会は京都大学大学院農

学研究科の私の研究室（当時，経営情報会計学分野と農林中央金庫寄附講座「次世代を担う農企業戦略論」とを私が統括として一体運営していた）に置き，この研究室の長谷祐研究員（現農林中央金庫総合研究所主事研究員），後に川崎訓昭特定助教（2020年4月から秋田県立大学助教，本年（2024年）4月から摂南大学農学部准教授）と，当時京都府立大学大学院農学研究科の本杉日野教授（ワイン用ブドウのご専門家），学会本部事務局との調整を担う山梨大学ワイン科学研究センターの久本雅嗣准教授とが編集幹事として常任編集委員会を組織し，編集の実務に当たっていました。しかし，2015年11月15日の深夜に本杉教授が突然の交通事故でお亡くなりになったことで，同じくワイン用ブドウを研究されておられる名城大学農学部の中尾義則准教授（前職は山梨大学ワイン科学研究センター講師（研究機関研究員））に参画してもらうことになりました。そして，私が京都大学を退職した後，2020年4月から勤務することになった（公財）ルイ・パストゥール医学研究センター・医農食情報環境連携研究室内に編集委員会を移し，現在，私と共に中尾，久本，川崎（敬称略）

の四人で常任編集委員会を組織して編集実務を担っています。

私の代で行った編集委員会のこれまでの改革は、1つ目は査読システムの改革です。特に論文担当者制を導入したことです。これは、基本、編集委員の先生方に投稿された論文それぞれの担当者に輪番制でなってもらい、二人の査読者と論文投稿者との間のやり取りを全て担当してもらうというものです。そして2つ目が、この論文担当者制を前提として、2人の査読者と論文投稿者とのやり取りと共に、常任編集委員会とのやり取りも含め、全てをオンライン上で完結させるというものです。この改革の結果、常任編集委員会に投稿された論文を論文担当者の編集委員にメールで送り、査読結果を論文担当者の編集委員から常任編集委員会に送ってもらうことで、投稿論文の事前チェックや最終的な採択判断だけを常任編集委員会が責任を持って行い、さらに常任編集委員会は昔のような郵送手続きを含む細々とした雑務から解放され、学会誌をより良くするための編集企画や構成に軸足を置けるようになりました。また、常任編集委員会と本部との学会誌の出版に当たる雑務を可能な限り軽減する取組も行いました。当然に、これらの改革は常任編集委員会の先生方のご努力の成果であり、私の功労賞の前半部分のタイトルに関しては、私個人ではなく常任編集委員会に対しての功労賞だと思っています。

ICT化の進展で他の多くの学会と同様に親学会のASEVの学会誌は、従来のような紙ベースを基本とした巻・号を廃止し、オンライン上に逐次、論文をアップするようになりました。そして、冊子媒体を必要とする読者にはオンライン上に掲載された論文を年に二回に分けて、紙ベースで刊行する形態になりました。このような事情で、今後、オンライン上の文献等を引用する場合、DOI (Digital Object Identifier) といった記号を付す必要が出てきています。我々の学会誌は、まだまだそこまでは進んでいませんが、今後は親学会と同様なシステムに移行し、文献引用のフォーマット等も含め、少なくともオンラインを中心にしたシステムに移行していく必要があると考えております。

次に、功労賞の後半部分のタイトルに関してご報告させていただきます。このご報告をするためには、

私がワイン研究を始めた経緯から始める必要があります。

事の始まりは、2000年3月から米国加州のUCDavisで在外研究員としての活動を始めた頃、偶然に大分県にある安心院葡萄酒工房（麦焼酎「いいちこ」で有名な三和酒類株式会社の子会社で当時は設立されて間もない頃）から派遣され当工房の未来を託された古屋浩二氏（現在、エノログで日本のワイン文化普及のオピニオンリーダーの一人、当工房の中心人物）とお会いしたことです。UCDavisに赴任して直ぐに、研究の合間を利用して英語の勉強のためにUCDavisのエクステンション部門が学内で運営する英語の語学学校に1クォータ（3ヵ月）の期間、コマ取（読解、会話、英作の3コマ）で受講しました。通常は、コマ取りでの受講はできなく、クラス単位の授業を受講する必要がありますが、在外研究員ということで許されました。受講を始めて間もない頃、いくつもあるクラスの中で私が受講していたクラスに遅れて日本の方が受講されるようになり、俳優の鶴田浩二を思わせる男前で親しくお話しさせて頂いておりました。その方が古屋氏です。古屋氏は、UCDavisのワイン・ブドウ学科でワインの官能（センサリー）評価で有名なノーブル先生（Ann C. Noble）の研究室に在籍されておられました。ノーブル先生は、Wine Aroma Wheel（通称、Noble Wheelと呼ばれる）を開発された先生です。私は、UCDavisの農業・資源経済学科で研究室を持ち、当時、日本で行っていた果樹園芸経営・経済研究の延長線上で、「アメリカ・カリフォルニアにおける果樹生産・加工経営及び果樹産業のファイナンシャル・マネジメント問題に関する研究」という課題で調査研究を行う予定でした。確かに、UCDavisは、ワインとワイン用ブドウの研究のメッカであるのは判っていましたが、伝手が全く無かった訳です。しかし、古屋氏と知り合ったお陰で、ワインに関する様々な情報を容易に得ることができました。また、デービスでのお住まいも同じ市内ということで、家族付き合いもさせて頂くことができました。

まず古屋氏は、ナパにあるマーカム（セントヘレナ市の直ぐ北）という中堅ワイナリーがメルシャンの所有で、当時、駐在員をされておられた長尾秋利氏をご紹介下さいました。長尾氏からは、マーカム

も含め、ナパのワイナリーの実情について詳しくお聞きすることができました。食事も一緒に、ロバートモンダビワイナリーが手掛けていたジョイントベンチャー事業でイタリアのフレスコバルディと共同で造った「ルーチェ」という稀有なワインを呑ませてもらったこともありました。

また、古屋氏の勧めで、2000年6月にシアトルで開催されたASEV年次大会に初めて参加する機会を得ました。初日の夜に、長尾氏を夕食にお誘いしましたが、その日の夜はメルシャンから重役が来られて接待をしなければならないと仰られて諦めました。次の日、大会のレセプションがシアトルのエリオット湾周辺を遊覧しながらの船上で開催され、丁度、当時ASEVの会長であられたノーブル先生の近くに座ったことで、これまた偶然に佐藤充克先生（当時、湘南にあるメルシャン（株）の酒類研究所（現中央研究所）の所長で現山梨大学ワイン科学研究センター客員教授）とお知り合いになりました。そのレセプションの後に佐藤先生と意気投合して二人でシアトルの市内を深夜まで一緒に梯子しました。シアトルは深夜でも本当に安全な都市で、丁度入店した店で新婚夫妻のパーティーが行われており、このパーティーに紛れ込んで参加メンバーと一緒に遊ぶことにもなりました。後で判ったのですが、前日に長尾氏が言われていたメルシャンの重役とは、佐藤先生のことでした。その後、佐藤先生には様々な場面で、本当にお世話になっております。

その秋に、古屋氏がオレゴン州のキングエステートに修行に出られるということで、本来、古屋氏がお世話をするようになっていた山梨大学ワイン科学研究センターの高柳勉助教授（山梨大学教授を経て2009年4月に東京工科大学に転籍）がUCDavisに短期で研究派遣されてこれ、古屋氏の依頼で私がお世話をするようになりました。一週間程度の期間でしたが、ここでも高柳先生と意気投合し、デービスの拙宅にもお招きし、当時デービスにお住いで友人の落合孝次氏（当時は、デービスの西南隣のディクソン市にあるサラダコスモのモヤシ工場の主任技師、現熊本大学薬学部先端薬学教授、DAIZ株式会社取締役研究開発部長）もお呼びしてバーベキューパーティーを催したことを思い出します。古屋氏からは、日本には日本ブドウ・ワイン学会という学会

があり、ASEVの日本支部として活動していると聞かされており、高柳先生がその役員をされていることも知りました。

古屋氏は、ナパ・シルベラードヒルズにおいて日本人で初めて醸造責任者となられ15年間に渡って素晴らしいワインを紡がれていた知人ぞ知る川邊久之氏（当時、英語が達者で関係者の間では「ヤンキー」（真のアメリカ人という意味で）と呼ばれ、肩まで髪の毛を伸ばされていました）もご紹介下さり、川邊氏からは実地で多くのことを学ばせて頂きました。川邊氏は帰国後、山形県の有名な高畠ワイナリーの取締役製造部長にご就任され、多くのセミナーやご講演、ご執筆活動等をこなされておられました。ある講演会で一緒にしたこともございます。しかし残念ながら、川邊氏は2022年12月2日に多くの方に惜しまれる中、ご逝去されました。

さらに、秋からのUCDavisワイン・ブドウ学科の月曜日午後からの講義を古屋氏に勧められて受講することになりました。その講義は、加州で活躍されているUCDavis出身のワインメーカーの方々に講師として講演してもらった後、そのワインメーカーのワイナリーのワインをバーベキューと共に試飲するというユニークなものでした。この講義を古屋氏と共に毎週楽しみにしていました。この時、講演されたワインメーカーの方々とは、後にASEVの年次大会でお会いすることもあり、本当に良い経験をさせて頂きました。ただし、私のUCDavisでのワイン・ブドウ学科の科目の受講は、この講義だけでした。ワイン・ブドウに関する勉強は、全てUCDavisのエクステンション部門が提供する公開講座（土日が基本）を受講することで行いました。私は基本、平日は農業・資源経済学科のゼミや講義を中心に、本来の課題研究に関して研究活動を行っていました。

古屋氏には、キーパーソンとなられる多くの方をご紹介下さったり、北加州の主要なワイナリーや樽製造会社を含む関連施設をご案内下さったりして、ワイン・ブドウに関する多くの勉強をさせて頂き、本当にお世話になり心より感謝申し上げます。また、帰国後は、安心院葡萄酒工房にも何回もご訪問させて頂き、勉強させて頂いております。

翌年（2001年）の9月11日の朝6時頃（米国西部海岸と東部海岸とは3時間の時差がある）、以前に家

内と昇ったことのあるニューヨークの貿易センタービルに飛行機が突っ込んだということで家内に叩き起こされました。その後、平和であった米国の景色は一変しました。その約1週間後に、大混乱の中、帰国することができました。

帰国して間もない頃、高柳先生から日本ブドウ・ワイン学会のセミナーで報告してくれないかと依頼され、2001年11月21日に山梨大学で開催されたセミナーで「これからのワイナリー経営と地域活性化」というタイトルで報告させて頂く機会を得ました。ワインに関する私の報告は、これが最初となります。今から考えれば無謀な報告だったと思います。座長がサントリーの渡辺直樹氏（元サントリー登美の丘ワイナリー場長）でした。渡辺氏には、その後に色々と勉強させて頂きました。この報告の後、最初に質問されたのがこれもサントリーの萩原健一氏で、的確なコメントを頂戴し勉強させて頂きました。この時、私は京都大学体育会水泳部の部長をしていることも紹介されました。萩原氏が「私の娘も水泳をしているのですよ」と仰られたのですが、まさかオリンピック選手で「ハギトモ」の名で有名な萩原智子氏のこととは思わず、報告と共にここでも恥ずかしい思いをしたことを思い出します。その後、萩原氏は、岩の原葡萄園の社長、株式会社サドヤの社長そして顧問となられ、この間にも色々と直接に教を乞うことができました。このセミナーの報告の中で整理した十点の社会科学領域の課題（第13巻第1号「2001年度セミナー概要」に掲載）がその後の私や私の研究グループのワインビジネス研究のベースになりました。そして、このセミナーの後、直ぐに同学会の専門会員になりました。

翌年、満を持して応募した科研基盤研究(B)に採択され、2002年から3年間に渡り「ワインビジネスの展開とそれを取巻く社会・経済環境に関する国際比較研究」という研究課題でフランス、特に南仏とカリフォルニアを実地に調査できる機会を得ました。これも、高柳先生にこのセミナーに呼んで頂いたことがベースになっています。

余談ですが、翌2003年6月にASEVの第54回年次大会がネバダ州のレノで開催されました。この折、我々の科研グループ（当時、神戸大学農学部伊庭彦助教授や先ほどの落合氏）でバンをレンタルし、

高柳教授や当時助教授の奥田徹先生を乗せてデービスからレーク・タホに近いレノに行ったことありました。高柳先生はちょっとしたお悩み事があり、ホテルの私の部屋でそのお話しをお聞きしていましたが、その間、落合氏の指南を受けながら奥田先生達はカジノで遊んでおられたことを思い出します。ちなみに、奥田先生達はカジノで儲かったそうです。

この年(2003年)の12月に開催された日本ブドウ・ワイン学会東京農大大会で、伊庭先生(2014年4月に神戸大学から京都大学の私の研究室に准教授として赴任)と私が初めて口頭報告を行いました。タイトルは「地域活性化とワイナリー経営の発展に関する考察—わが国の地方中小ワイナリーの多角的事業展開を視点として—」です。また、翌年の2004年4月に私が京都大学の法人化第一号の教授に昇進した後、サンディエゴで6月に開催されたASEVの第55回年次大会のポスターセッションで伊庭先生、落合氏と私の三人の共同報告として発表しました。タイトルは「Wine Industry in Japan: Production, Distribution and Consumption – Changes after the wine boom in 1998 –」です。

このように2000年から始まった私の社会科学領域でのワイン研究は、研究を始める切っ掛けからして多くの偶然・たまたまが積み重なって、また古屋氏や高柳先生等、多くの方々に支えられてここまで来ることができたと思っています。

確かに当学会では、我々の諸報告の以前に社会科学領域での口頭報告や論文は散見されます。しかし、理論的な考察まで含めたものは、私を含む研究室のスタッフや学生により成されたといっても過言ではありません。当学会大会時の社会科学領域の口頭報告とこれまで学会誌に掲載された論文等については、表①と表②に整理しておきました。青色でハイライトされているのが、私を含む研究グループでの共同報告・執筆です。また、黄色でハイライトされているのが、私の研究グループの何方かのものです。特に、2020年に掲載されました研究報文「次世代への農業生産諸資源の継承に果たすツーリズムの可能性—カタシモワインフーズ株式会社を事例として—」は、この年の論文賞を受賞しました。

この間の日本ブドウ・ワイン学会での活動やそれ

表① 日本ブドウ・ワイン学会大会での社会科学領域に関する口頭報告

	年	開催地	講演タイトル	執筆者
1	1999	青森	地域ワイナリーの現状と意識調査	徳田宏晴, 他3
2	2003	東京農大	日本人の夕食における飲酒動向	地頭所裕美, 他2
3	2003	東京農大	藤村雅蔵による国産ワイン醸造の起源について	勝田 章
4	2003	東京農大	地域活性化とワイナリー経営の発展に関する考察 —わが国の地方中小ワイナリーの多角的事業展開を視点として—	伊庭治彦, 他1
5	2004	甲府	わが国に於けるカスタム・クラッシュの課題と将来方向	伊庭治彦, 他3
6	2005	京都大学	ワイン産業の発展とツーリズム・テロワール	伊庭治彦, 他3
7	2006	近畿大学	ツーリズム・テロワールを軸としたワイナリー事業の新たな可能性	伊庭治彦, 他3
8	2007	甲府	ブドウ栽培・ワイン醸造事業への新規参入を巡る動向と今日的課題	仙田徹志, 他4
9	2008	山形	野生ブドウを主軸としたブドウ栽培・ワイン醸造事業の特質と課題	小林康志, 他4
10	2009	広島	ワイン用ブドウの契約栽培と地域農業の振興	川崎訓昭, 他4
11	2010	甲府	地域密着型ワイナリービジネスの事業構造に関する分析 —製品ラインアップと財務構造を視点として—	長谷 祐, 他5
12	2011	塩尻	ワイン産業の特質とカスタム・クラッシュ事業の機能と展望	小林康志, 他7
13	2011	大分	ワイン用原料の調達方法と課題 —ワイナリー経営の戦略を視点として—	長谷 祐, 他7
14	2012	大分	コミュニティの活性化を目指した小規模ワイナリーの存立要件	小林康志
15	2013	甲府	わが国ワイン産業におけるバルクワインの役割と展望	長谷 祐, 他6
16	2019	甲府	農業生産諸資源の再生・保全・継承とブドウ・ワイン造りへの参入	沢田 泉, 他9
17	2020	オンライン	地域の中小ワイナリーにおける商品ラインナップとワイン表示の課題	沢田 泉, 他8
18	2021	オンライン	日本の後発ブドウ産地育成上の課題と可能性	川崎訓昭, 他7
19	2022	オンライン	醸造用ブドウ産地からワイン産地への転換上の課題と可能性	川崎訓昭, 他3
20	2023	名古屋	ワイン・テイスティング語彙「ミネラル」についての社会言語学的考察	鈴木隆芳
21	2024	名古屋	フランス就農支援制度「農業テスト空間」に関する一考察 —ノルマンディのシードル農家を例に—	峰尾幸宗

表② 日本ブドウ・ワイン学会の学会誌に掲載された社会科学領域に関する論文等

	年	種類	言語	論文等のタイトル	執筆者
1	2000	研究報文	和	日本の地域密着型ワイナリーの現状と意識調査	徳田宏晴, 他4
2	2001	セミナー概要	和	これからのワイナリー経営と地域活性化	小田滋晃
3	2003	セミナー概要	和	ワインと観光	花岡利幸
4	2005	研究報文	和	わが国のワイナリー経営と地域活性化の論理 —地方中小ワイナリーの事業多角化を視点として—	伊庭治彦, 他1
5	2009	解説	和	EU ワイン改革とワイン法	安田まり
6	2011	研究報文	和	地域密着型中小ワイナリー事業の持続可能な展開方向に関する実証分析 —ワイン原料の調達先から見る製品ラインアップを視点として—	川崎訓昭, 他7
7	2012	研究報文	和	わが国ワイン産業のネットワーク構造と作業受委託事業	長谷 祐, 他8
8	2013	研究資料	和	非営利組織が経営するワイナリーの実態と課題	小林康志
9	2020	研究報文	英	次世代への農業生産諸資源の継承に果たすツーリズムの可能性 —カタシモワインフーズ株式会社を事例として—	小田滋晃, 他5
10	2021	学術情報	和	GI大阪取得への挑戦	高井利洋
11	2023	研究報文	英	農業生産諸資源の再生, 保全, 継承とブドウ, ワイン造りへの参入	小田昌希, 他9
12	2023	研究報文	英	ワイン原料用ブドウ生産者が持つ農地保全効果についての考察	小田昌希

に関連する活動は次の通りです。まず、2005年11月に私が大会実行委員長となって京都大学で大会を開催しました。その時の学会誌に掲載した巻頭随想に「わが国におけるワイン経済・経営研究領域の認知をめざして」というタイトルで執筆しました。続いて、2018年11月に2回目の京都大会を大会実行委員長として招致しました。その時の巻頭随想はのタイトルは、「ワイン・ブドウにかかる研究・教育・普及活動と国内外のネットワーク」でした。

他の関連活動としては、2014年度より日仏学術・学生交流事業を開始し、Montpellier SupAgro（農業科学高等教育国際センター、現INSTITUT Agroとして組織替え）のワイン・ブドウ高等教育研究部門（IHEV）と農林資源・食料・環境経済経営高等教育研究部門（MoISA）との協力の下、『南仏伝統産地のワインビジネス戦略』という科目が京都大学で正式に立ち上がり、毎年実施（コロナ禍のためオンラインも含む）しながら現在まで継続されています。また、2017年12月から4か月間、Montpellier SupAgroから招聘されて客員教授に就任しました。さらに、ボルドー大学ワイン科学研究センターに事務局があるOENOVITI INTERNATIONALに京都大学大学院農学研究科が2017年5月より加入、また2020年3月に京都大学を退職し、（公財）ルイ・パストゥール医学研究センターの現研究室に移った後、2021年5月に当センターも加入することになり、両加入の際のお手伝いをさせて頂きました。そして、昨年（2023年）5月にOENOVITI INTERNATIONAL日本大会（京都・甲府・新潟）を奥田先生と共に主催させて頂きました。

今回の功労賞のタイトルの後半部分に関しては、私のこれまでの日本ブドウ・ワイン学会での活動や関連諸活動に対して評価を賜ったものと考えています。その意味で、本当に光栄なものと存じます。

近年、当学会での社会科学領域での口頭報告や論文も徐々に増加してきています。学会員となる社会科学領域の研究者も増えつつあります。その意味で、社会科学領域におけるワイン・ビジネス研究における今後の展開方向としては、次の5項目が今後、課題として考えられると思います。

- ①ワインツーリズム／エノツーリズムの深化
- ②地域におけるワイン産業クラスターの広がり

カスタムクラッシュ事業の行方

- ③ワインの適正価格水準（原価情報の管理）の計測と認識
- ④和食文化の中での日本ワインの地位と役割
- ⑤ワインマーケティングの新たな地平

ワイン研究は、ブドウ栽培も含め技術的には農学、工学、生活科学（官能評価等）の重層的な大きな領域に跨っています。また、紡がれたワインは、文化的、歴史的にも奥深いものがある極めて特殊な食品と言えます。しかし、資本主義経済下にある我々の社会で、素晴らしい品質のワイン造りを末永く持続可能とするためには、経済的・経営的側面を踏まえたビジネス対応が欠かせません。要するに、毎年生み出されるワインを消費者に再生産可能な適正な価格以上で買ってもらう必要があるということです。そのためにも、社会科学領域でのワイン・ブドウ研究は、マーケティング領域も含め今後も重要な研究領域になると信じます。